

南堀之内遺跡
大畑遺跡

1988. 3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、県営住宅建設に先立ち、1979年度に発掘調査された山梨県大月市鳥沢地内の南堀之内遺跡、および国道140号線の拡幅工事に先立ち、1979年度に発掘調査された山梨県甲府市横根町地内の大畠遺跡について、その結果をまとめたものであります。

南堀之内遺跡は、桂川左岸の段丘上に位置した奈良時代の遺跡です。住居址内の土師器は相模型と呼ばれるものが出土しており、古代甲斐国の大留郡が隣接する相模國と密接な関係にあったことをうかがえる遺跡となっています。

大畠遺跡は、主に古墳時代から平安時代の土器が出土しています。本遺跡の近くには、横根・桜井積石塚古墳群、国分寺瓦の生産を行った上土器瓦窯址、甲斐国郡郷名で「山梨郡表門」と刻書された土器の出土で知られる大坪遺跡があります。本遺跡は出土土器の様相から、生産集落の存在を推測させる遺跡と思われます。

本報告書が、古代甲斐国研究のうえでの資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力賜わった関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1988年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本報告書は、昭和54年度に土木部から委託されて山梨県教育委員会が実施した大月市の南堀之内遺跡と甲府市の大畠遺跡の発掘調査報告書である。
2. 南堀之内遺跡の発掘調査は、田代孝、小野正文、出土品等の整理及び報告書の作成は、田代孝が担当した。
　大畠遺跡の発掘調査は、森和敏、土橋久雄、出土品等の整理及び報告書の作成は、森和敏が担当した。
3. 写真撮影は、南堀之内遺跡の遺構・遺物は田代、小野、大畠遺跡は森が行った。
4. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
5. 出土品整理参加者

石川操、松野和美、内藤真千子、弦間千鶴

みなみ・ほり の うち
南堀之内遺跡

目 次

第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡概況	2
第1節 位置	2
第2節 地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 遺構・遺物	4
第1節 住居址	4
第2節 石組遺構	10
第Ⅳ章 まとめ	11

挿 図 目 次

- 第1図 南堀之内遺跡位置図
- 第2図 全体図
- 第3図 1号住居址平面図
- 第4図 遺物出土状況
- 第5図 北カマド
- 第6図 東カマド
- 第7図 1号住居址出土土器実測図（1）
- 第8図 1号住居址出土土器実測図（2）
- 第9図 1号住居址出土土器実測図（3）
- 第10図 集石墓平面図
- 第11図 土壌平面図

図 版 目 次

- 図版1 全景 発掘風景 1号住居址
- 図版2 1号住居址 カマド内土器 北カマド
- 図版3 1号住居址 東カマド（1） 東カマド（2）
- 図版4 炭化材 出土土器 集石墓と土壤
- 図版5 1号住居址出土土器（1）
- 図版6 1号住居址出土土器（2）

第Ⅰ章 調査状況

第1節 調査に至る経過

- 昭和54年 6月上旬 大月市富浜町鳥沢地内の県営住宅建築に伴う発掘調査の打合せを建築住宅課係員と現地で行う。
- 昭和54年 6月中旬 南堀之内遺跡の発掘通知を文化庁に提出する。
- 昭和54年 7月10日 南堀之内遺跡の発掘調査を開始する。
- 昭和54年 8月31日 発掘調査を終了する。
- 昭和54年 9月5日 遺物発見通知を大月警察署へ提出する。

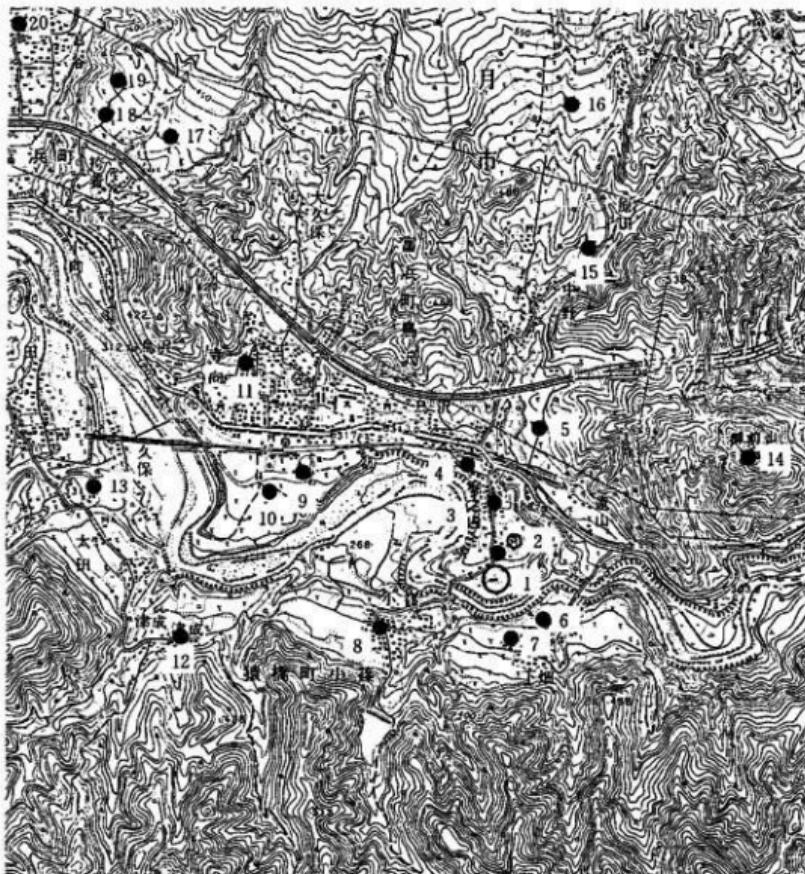
第2節 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会
- 調査担当者 文化財主事 田代 孝、小野正文
- 調査参加者 信藤祐仁、山田周平、杉浦章一
山根弘人、奥山和久
- 協力機関 大月市教育委員会

第Ⅱ章 遺 跡 概 況

第1節 位 置

山梨県大月市富浜町鳥沢字堀之内



1. 南堀之内遺跡 2. 犬鳴遺跡 3. 堀之内B遺跡 4. 堀之内A遺跡 5. 芹が井戸遺跡 6. 下原遺跡
7. 本郷遺跡 8. 小森遺跡 9. 入倉遺跡 10. 金山遺跡 11. 寺向遺跡 12. 津成遺跡 13. 岡遺跡
14. 斧庭御前山の烽火台 15. 原田御前山の烽火台 16. 山谷御前山の烽火台 17. 宮ノ上御前山の烽火台
18. 椅着御前山の烽火台 19. 八幡塚御前山の烽火台 20. 宮谷御前山の烽火台

第1図 南堀之内遺跡位置図

第2節 地理的・歴史的環境

遺跡は、桂川ぞいに発達した河岸段丘上に位置する。桂川流域の河岸段丘は、段丘面の高さや段丘を構成する堆積物の特徴、さらに火山灰層の対比などから、高位段丘、中位段丘、低位段丘に区分されている。また、遺跡のある中位段丘については、中位段丘Ⅰ面にあたる鳥沢面と上野原面、および中位段丘Ⅱ面に分けられる。遺跡は、中位段丘Ⅱ面にある。

中央線鳥沢駅から東へ700mほどで遺跡のある舌状を呈する段丘の北端部となる。段丘は南へ突き出た形状であるが、東流してきた桂川が段丘の西側と南側を走り、東側も沢が入って急崖となっている。国道20号線の通る北側のみがくびれて細くなっている。

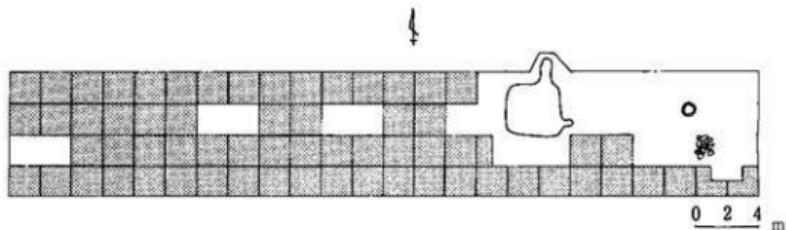
遺跡は南へ延びた段丘の中央近くにある犬嶋神社南側の崖下にある。調査地点には土師器の分布がみられたが、神社北側一帯には土師器、須恵器および縄文土器などもみられた。現在、土地利用としては畠地から宅地化が進んでいる。

大月市内の遺跡分布調査の成果を『埋蔵文化保護地調査』(昭和47年・山梨県教育委員会)、『大月市史料編』(昭和51年・大月市史編纂委員会)からみると、100ヶ所をこえる遺跡が紹介されている。その多くが河岸段丘上に存在していることが指摘されている。

調査地点となった南堀之内遺跡の位置する段丘上にも、縄文時代中期の堀之内A遺跡、堀之内B遺跡が知られている。さらに犬嶋遺跡として縄文土器・土師器の散布が報告されている。

犬嶋神社は、鎌倉時代に福地郷を所領とした鎌田氏の居館の中心部といわれている。鎌田氏については、『吾妻鏡』の建保元年(1213)条に、和田合戦後の論功行賞にあたって鎌田氏に福地郷が与えられたことが知られる。「堀之内」の地名からも中世館跡の所在をうかがうことができるが、『甲斐国志』によれば、「御堀」「馬洗場」「的場」などの地名をあげ、鎌田兵衛尉館址としている。

現在、大月市指定史跡となっているが、中世武士団の居館の立地として、きわめて好条件にあつたと推定される河岸段丘である。館跡の具体的な様相を解明するために考古学的な追究が期待されるところである。



第2図 全体図

第Ⅲ章 遺構・遺物

第1節 住居址

1号住居址

住居址は、調査区の東寄りで検出されたが、中位段丘Ⅰ面の崖下に近いために、住居址検出までには1mほどの厚い覆土除去を必要とした。土層は黒色土層を基本とするが、火山性的小粒子を含んでいる。

(形状・規模)

検出された住居址の形状は、ほぼ正方形に近いものとなっている。規模は、東壁3.5m、西壁3.5m、南壁3.8m、北壁3.5mを計り、わずかに南壁が長くなっている。カマドは、2ヶ所で確認された。1つは北壁中央よりやや東寄りに設置されたものと、もう1つは東壁中央よりやや南寄りに設置されたものである。

(床面・壁)

床面は、平坦でありほぼ水平となっているが、床面直上や壁際などに炭化した屋根材や柱材が多量にみられた。周溝は壁際にそって北壁の一部から西壁、南壁にかけてあり、東壁および北壁のカマド付近は認められなかった。周溝の幅は15~25cm、深さは10~15cmを計る。壁高は75cmほどである。なお、床面に柱穴を確認することはできなかった。

住居址内の出土遺物は、主に土師器の壊、甕が出土しているが、わずかに須恵器の出土もみられた。

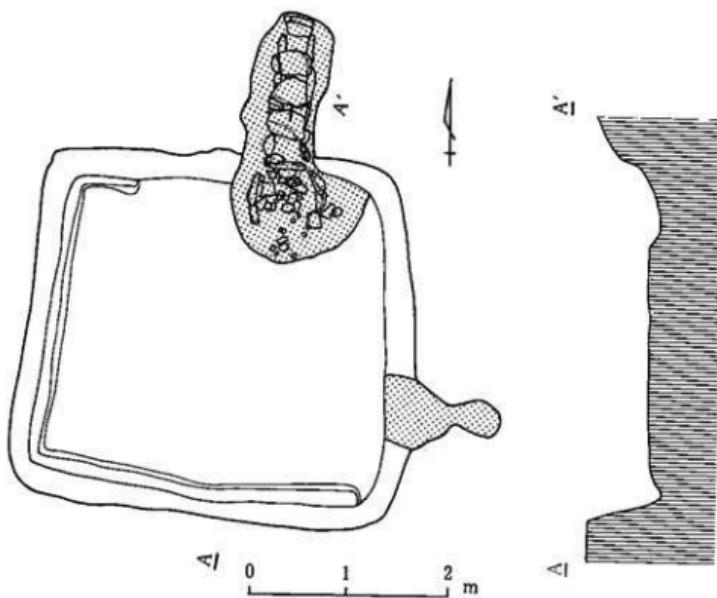
(カマド)

北壁に設置されたカマドは、石組みを基礎にして、それを粘土で覆った構造であり、遺存状態はきわめて良好であった。住居址内のカマド上部は崩落していたが、内部に長胴甕や石の支柱が残されていた。

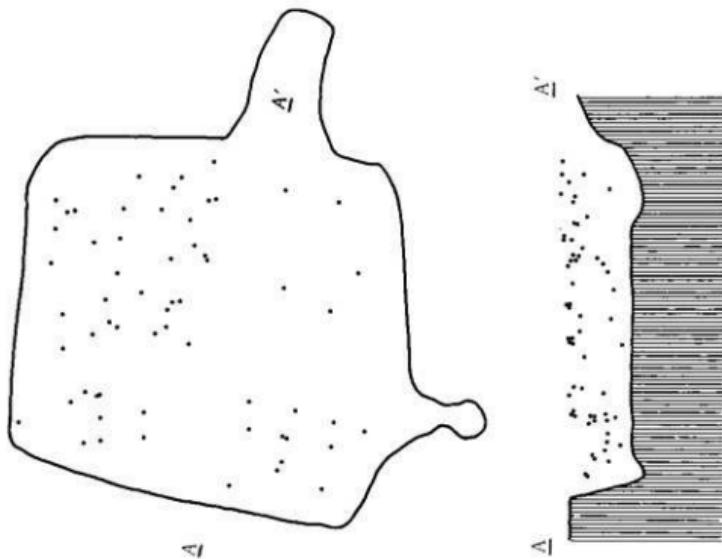
煙道部は、北へ向かって約1.4mの長さである。南北150cm、東西60cmの掘り込みを行い、40cm幅で石を並べ、その上に板状の天井石を置き粘土で覆ったものである。カマドの焚口は50cmあり、火床は10cmほど掘り下げてあった。

東壁に設置されたカマドは、住居址プランの検出の際に煙道部が確認された。煙道部は東へ70cmほどの長さであったが、石などの構築物は認められず、焼土や灰などの堆積がみられた。なお、カマドの燃焼部は失われており、火床も平坦な床面となっていた。ただし、壁面に煙道部の一部である粘土ブロックが認められた。

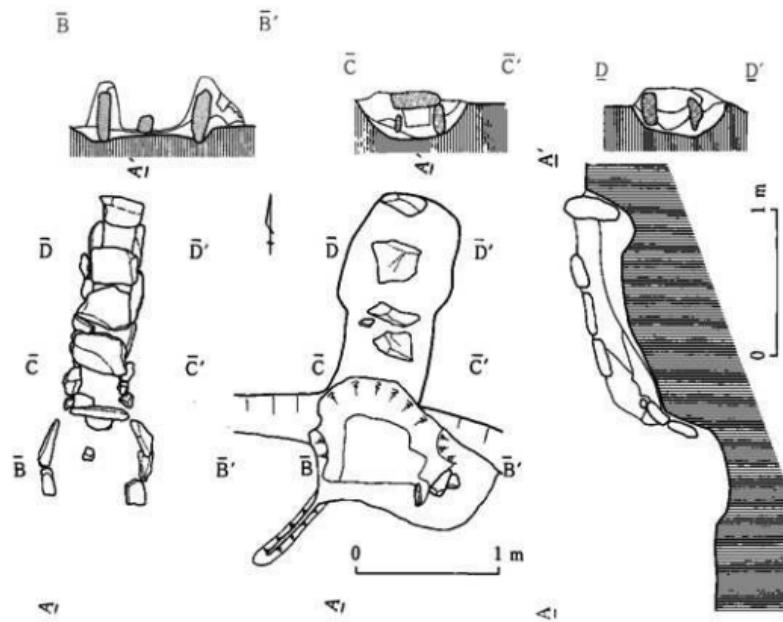
北カマドと東カマドの存在は、東カマドを先とし、北カマドが後に設置されたものである。北カマドの新設に際して、東カマドは撤去されたと考えられよう。



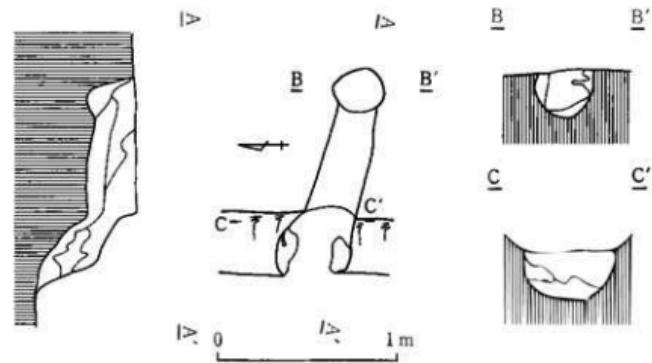
第3図 1号住居址平面図



第4図 遺物出土状況



第5図 北カマド



第6図 東カマド

(出土遺物)

第7図～第8図に示したものが出土土器である。土師器の壺形土器、壺形土器、須恵器などが出土している。

壺形土器第 図1は口径22.5cm、器高36.5cm、底径10cmを計る。胴部最大径は胴部上半にある。色調は茶褐色を呈し、胎土はきめが細かいが、わずかに石英小粒子と赤色の小粒子が含まれている。表面は口縁部に横ナデがみられ、胴部上半を主体に綫方向にヘラ調整がみられる。内面の口縁部にも横ナデ調整が行われている。器壁は薄い土器である。底部には木葉痕が残る。

2は口径約520cmを計る。胎土は小粒子を多く含む。口縁部の内・外面には横方向に刷毛調整がみられる。焼成は良好であり、堅緻である。3は口径は19cmを計る。胎土は石英や赤色の小粒子を多く含む。表面は口縁部に横の刷毛調整がみられ、胴部には綫の刷毛調整がみられる。口縁部の内面にも横への刷毛調整がみられる。焼成は良好である。

4は口径19cmを計る。胎土には石英・雲母、赤色の小粒子が多く含まれている。器壁は薄いが焼成は良い。表面は口縁部が横ナデ調整で、胴部は綫に刷毛調整を行っている。内面は口縁部が横ナデ、胴部は横の刷毛調整である。5は口径21cmを計る。胎土、色調、調整など1と近似している。6は口径20.8cmを計る。胎土、色調、調整など1、5に近いが、口縁部の外反がわずかなるのが特徴である。

第7図は23.5cmを計る。胎土、色調、調整は1、5、6と近似する。なお、胴部の内面に輪積み痕が残る。8は口径15cmを計る。二点とも口縁部の内・外面は横ナデであり、胴部表面は綫方向にヘラ調整である。胎土は小粒子が多い。

10、11は口唇部が有段状を呈するものである。表面は綫方向に刷毛調整がみられる。胎土は石英を含む白色の小粒子が多い。12は胴部の表面は綫方向のヘラ調整、内面は横方向のヘラ調整である。胎土は小粒子が多く含まれている。底部には木葉痕がみられる。14は口径17.5cmを計る。口縁部の内・外面に横ナデ調整がみられる。胎土に小粒子を含み焼成は良好で堅緻である。

(小型土器)

13は口径7.5cm、器高5.2cm、底径5.2cmを計る。胎土は小粒子を含む。色調は黄褐色を呈する。内面に横ナデがみられる。底部に木葉痕がある。

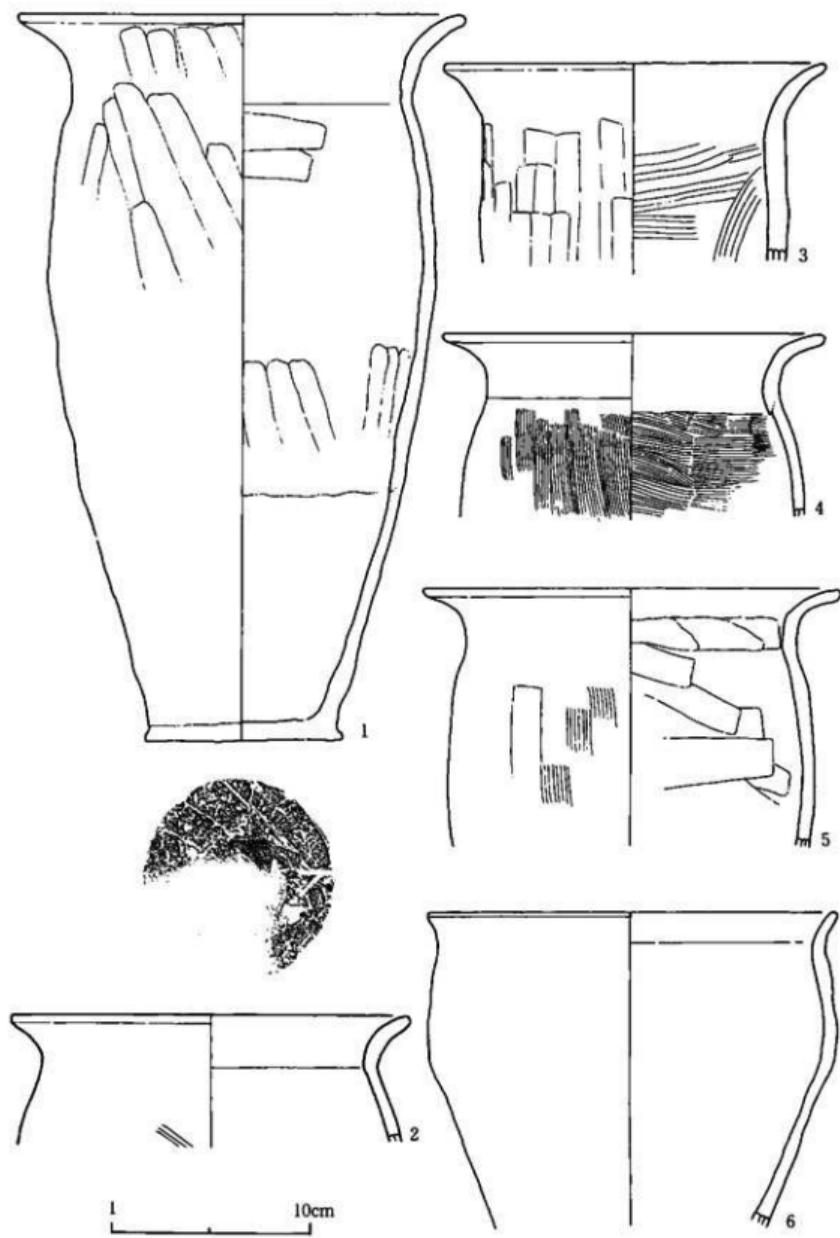
(壺形土器)

第15図は口径14.5cm、器高4cmを計る。胎土は細かく、わずかに小粒子が入る。焼成は良好で堅緻であり、色調は黄褐色である。底部をヘラ削りして丸底とし、口縁部と接する部分に稜線を残す。口縁部の表面は横ナデ調整を行っている。16、18、19、20も15に近似する土器であるが、16はやや平底で器高が低い。17は稜線をもたないものであり、胎土は1、5、6などと同質である。

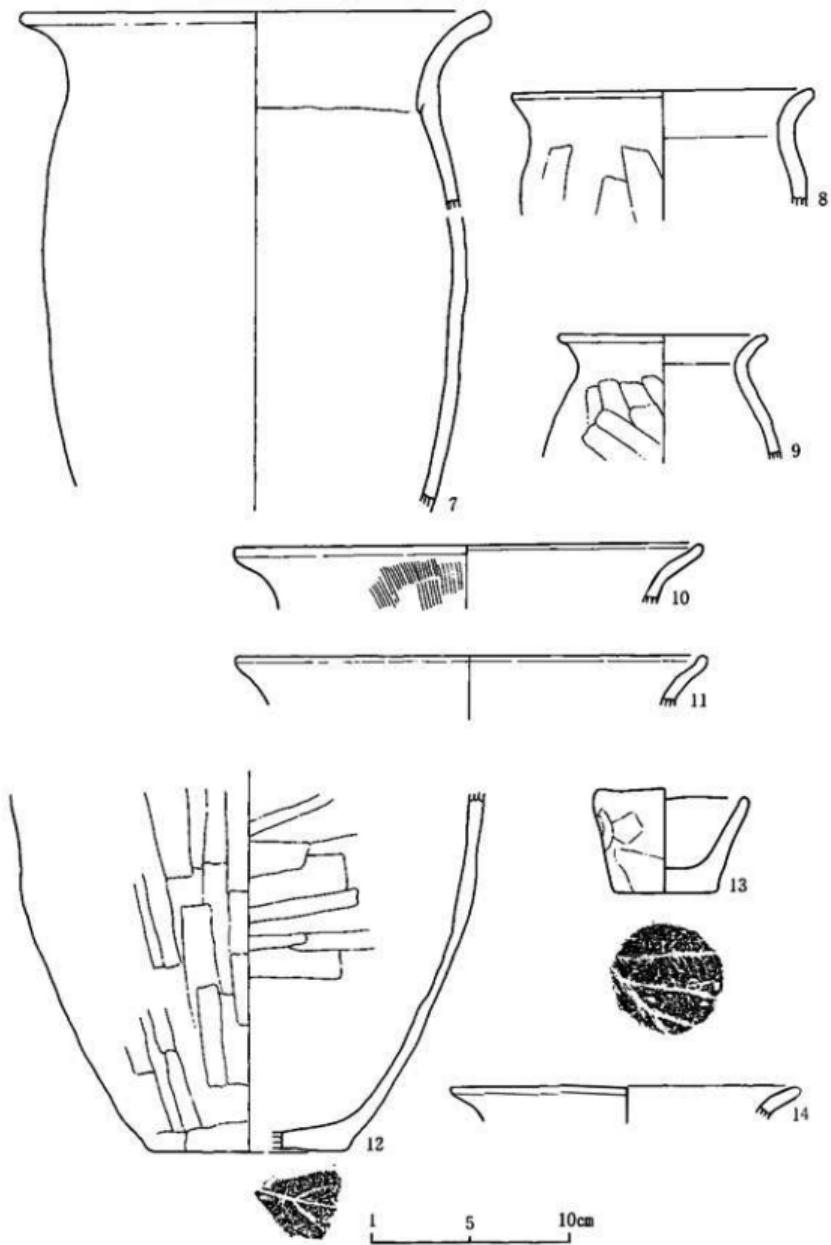
23は赤彩されたものであり、口径16cm、器高約5cmを計る。

(須恵器)

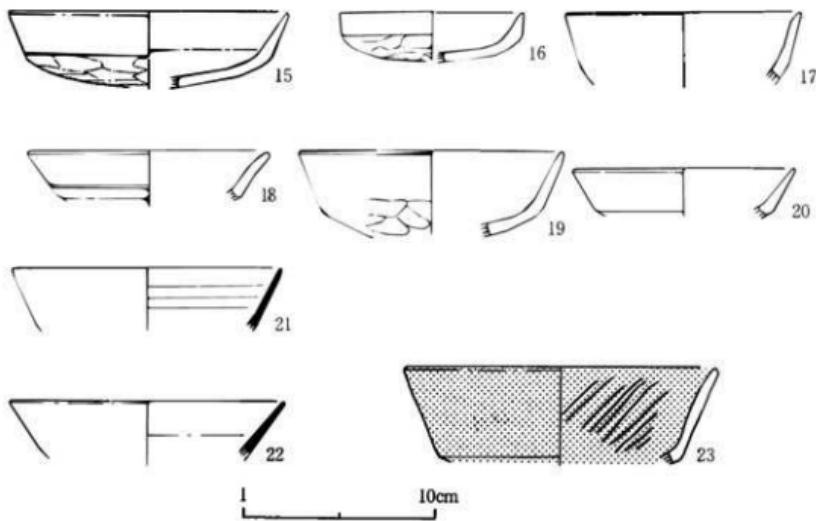
21、22は高台付壺の器形であろう。



第7図 1号住居地出土土器実測図(1)



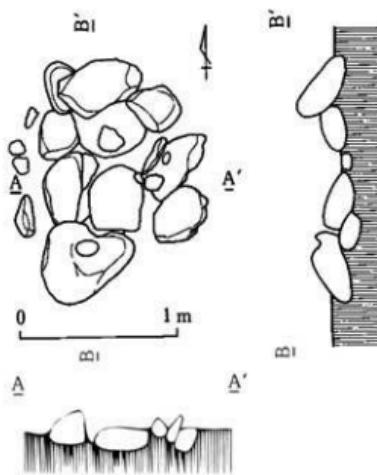
第8図 1号住居地出土土器実測図(2)



第9図 1号住居址出土土器 (3)

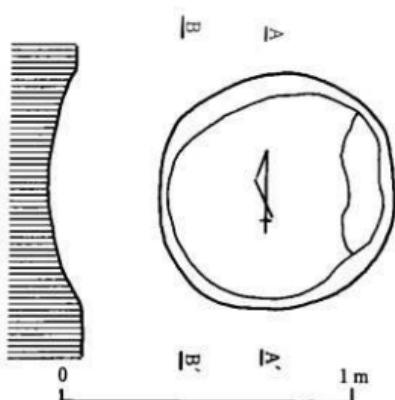
第2節 石組遺構

長径が30~60cmほどの板状の石を用いた遺構であり、南北1.5m、東西1.2mの規模である。遺構は1号住居址より東側において検出されたが、確認面は地表より深さ約60cmのところである。川原石を利用したと考えられる石組の中央部分で、常滑壺の口縁部近くの破片が出土している。中世墓的な性格を考えておきたい。



第10図 集石墓平面図

第3節 土 壤



第11図 土壌平面図

石組遺構の北側で検出された、直徑80cmの円形を呈する土壌である。黒色土層を掘り込んだものと考えられるが、確認面から底部までの深さは約10cmであった。土壌底部の東側の一部で焼土が認められた。遺構の性格や時期については不明である。

第IV章 ま と め

南堀之内遺跡は、住居址1、集石遺構1、土壌1が検出された。集石遺構は墓址としての性格が考えられたが、土壌については不明とせざるを得なかった。

第1号住居址は、遺存状況が良好であったが、火災住居の様相を示すものであった。また、東カマドと北カマドの存在は、同一住居内での新旧関係を示すものであった。この住居址の時期を出土土器から考察し、あわせて若干の課題にふれておきたい。

出土土器は、土師器の壺形土器、坏形土器が多く出土しているが、それらの土器はいずれもいわゆる相模形土器の特徴をもつものである。

壺形土器は長胴壺である。胴部内外面をハケメ整形したもの(第7図4)、ナデ整形後局部にハケメ整形をもつもの(第7図5)、ナデ整形のもの(第8図7)、ナデ整形後に胴部上半に縦方向のヘラケズリをもつもの(第9図1)などがある。全体としてⅡ期の様相が顕著であることが指摘できる。

坏形土器は底部にヘラケズリした丸底で、口縁部との境に稜線を残すものであり(第9図15、16、18、19、20)、鬼高式土器の特徴を引くものである。口縁部が外反し、平底気味の底部をもつもの(15、18、19、20)と、底部が平底化したもの(16)があり、Ⅱ期の特徴を示している。また、赤彩した盤状坏(第9図23)の出現もⅡ期の特徴であるとされる。Ⅱ期の年代は715~725年頃に位置づけられているところから、第1号住居址は奈良時代初頭とすることができる。

つぎに奈良時代初頭とした第1号住居址は、古代甲斐国領域のうち、郡郷としてはいずれに属するのか検討しておきたい。

古代甲斐国は、平安時代の『和名抄』によれば、山梨・八代・巨摩・都留の4郡であり、都留郡については、相模・古郡・福地・多良・賀美・征茂・都留の7郷がみえる。本遺跡の所在する大月市富浜町鳥沢付近は、福地郷に入るとされるのが定説であり、その郷域は大月市富浜町・梁川町から猿橋町あたりが考えられている。このことは富浜町鳥沢、同宮谷、梁川町綱之上などで土師器の遺跡分布が知られていることとも一致している。以上のことから本遺跡が平安時代では福地郷に入っていたことが明かであるが、それ以前については明かではない。

都留郡地方のうち大月市以東は古墳時代後期頃には相武国の領域に入っていたとする考え方や、都留郡にみられる矢作部・丈部・当麻部などの部民は、相模地方に顕著に存在していることから、7世紀以前の都留郡地域が相模国造の支配地域に含まれていたとする指摘がある。さらに奈良時代の土器様相から8世紀前半は周辺地域の影響が強く、8世紀第3四半世紀に盆地側の影響が強くなるとしている。また、天平宝字5年(761)の都留郡散仕矢作部宮麻呂の名前がみられる正倉院文書の存在などから、都留郡の成立を8世紀第2四半世紀から第3四半世紀頃としている。

これらのことから、本遺跡が桂川に沿って相模地方と深く結びついていたことが知られるのであるが、出土土器が相模地域の土器の特徴をもつことから相模国の領域に含まれていた可能性もある。ただし、相模形土器の使用をもって、相模国とすることもまた注意する必要がある。

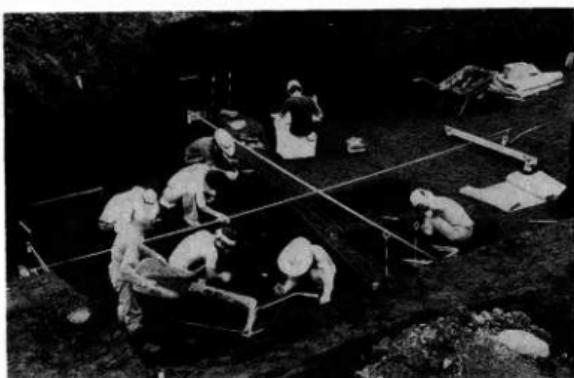
甲斐国都留郡の成立時期やその領域の変化など解決する課題が多い。今後、これらの課題にせまり得る考古資料の増加を期待すると同時に奈良時代の土器研究のいっそうの発展が望まれるところである。

参考文献

- 磯貝正義 「古代」『大月市史』1978
坂本美夫 「甲斐国における古代末期の土器様相」『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第21号 1968



全 景



發掘風景



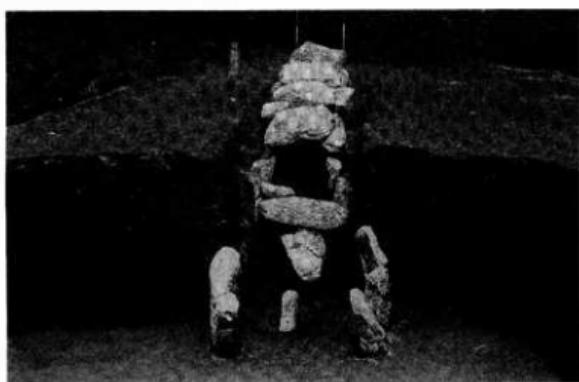
1号住居址



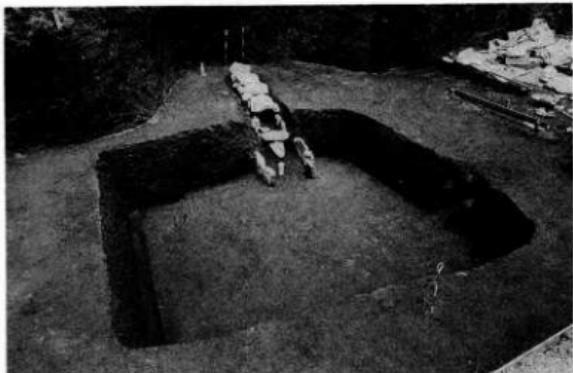
1号住居址



カマド内土器



北カマド



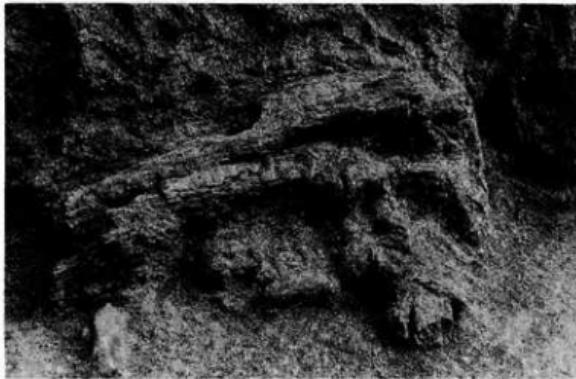
1号住居址



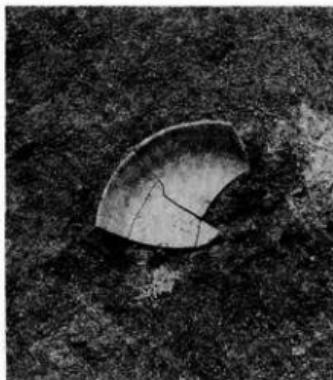
東カマド(1)



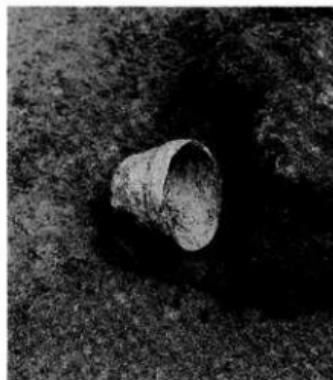
東カマド(2)



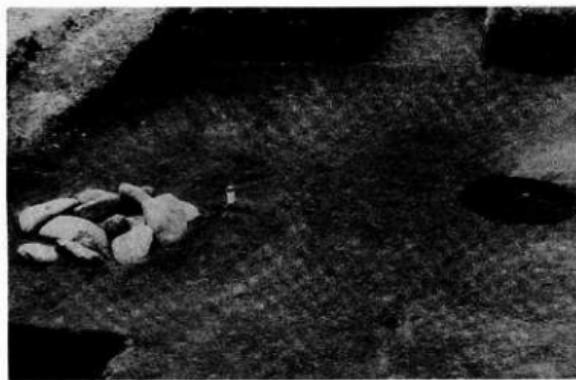
炭化材



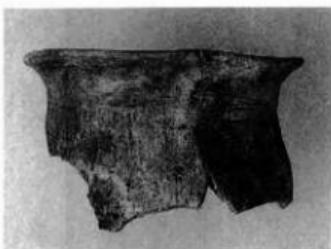
出土土器



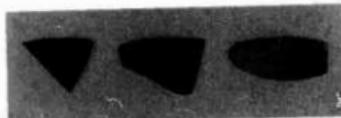
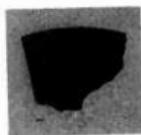
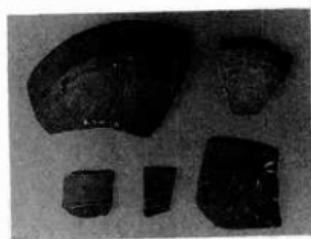
出土土器



集石墓と土壤



1号住居址出土土器（1）



1号住居址出土土器（2）

おお はた
大 番 遺 跡

大畑遺跡

目次

- 1 経過
- 2 位置と環境
- 3 層序
- 4 遺構と遺物

1 経 過

昭和54年10月上旬に青梅街道（国道140号線）の拡幅工事について甲府土木事務所係員と打合せと現地踏査を行い、発掘調査は同月30日に始め、11月9日に終了した。

調査担当は県教育委員会文化財主事森和敏、土橋久雄が、調査員は折井忠義氏、佐野勝広氏があたり、地元の主婦や山梨大学生横小路豊、山口富士男の各氏や、山梨学院大学生に参加していただきて調査を進めた。

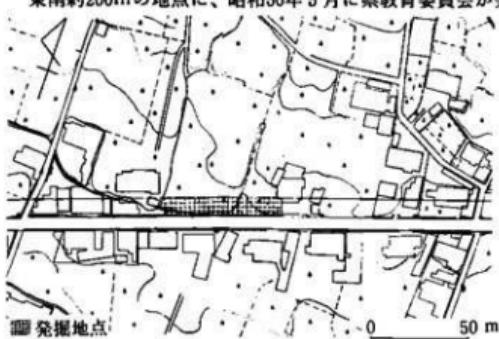
発掘地区は非常に粘質の強い黒色腐食土であったため掘り難く、遺構の検出に難渋した。結局西端で若干の遺構と遺物を検出したにすぎなかった。なお整理、執筆等は森があたった。

2 位置と環境

遺跡は甲府市横根町字大畑625番地とその付近に広がっていて、ぶどう畑等になっている。ここは甲府盆地底部冲積地の北縁にあり、北は秩父山系の山が約500m近くまでせまっている、ここから発する笛吹川支流の平等川と瀧川に挟まれた中間地点にある。この両河川の堆積作用によってできた厚い冲積層の中に遺構の包含層があり、付近はほとんど傾斜のないほど平地になっている。

東南約200mの地点に、昭和50年5月に県教育委員会が発掘した平安時代の大坪遺跡があり、また国分寺瓦の窯跡が発見されたと言われる場所も付近にある。

相対的位置は、中央本線酒折駅の東方約1,200mで、横根町集落の中にある。



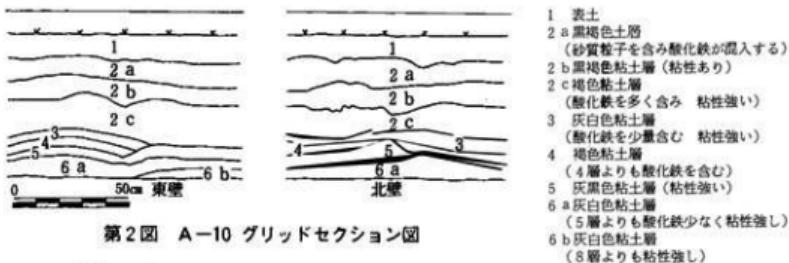
第1図 発掘地点付近図

3 層序

発掘区全域は表土から約120cmまで、強い粘質の黒色腐食土層（セクション図では「粘土層」）があり、その下層も粘質土層が続く。遺構は第2層と第3層に包含され、地表から40～50cmの高さにその掘り込み面がある。

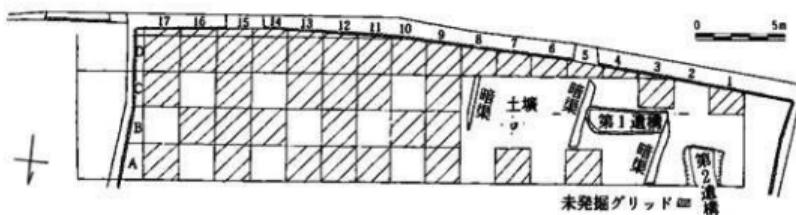
第2図はA-10グリッドのセクションである。表土は耕作土で、今はぶどう園であるが、かつては水田であったという。第2層上部に水田によって形成された不透水層（床土）があって、2～3cmの厚さに酸化鉄が蓄積され、赤褐色になっている。第2c層上部にも第2層と同様に2～3cm酸化鉄が蓄積されている。この層もかっては水田の床土になっていたものと考えられる。

甲府盆地一帯に施行された条里型地割の北端が、この遺跡の付近になるので、当時の水田址の疑いもあるので、第2c層の酸化鉄を含む層は重要な意味をもつものと思われる。



第2図 A-10 グリッドセクション図

4 遺構と遺物



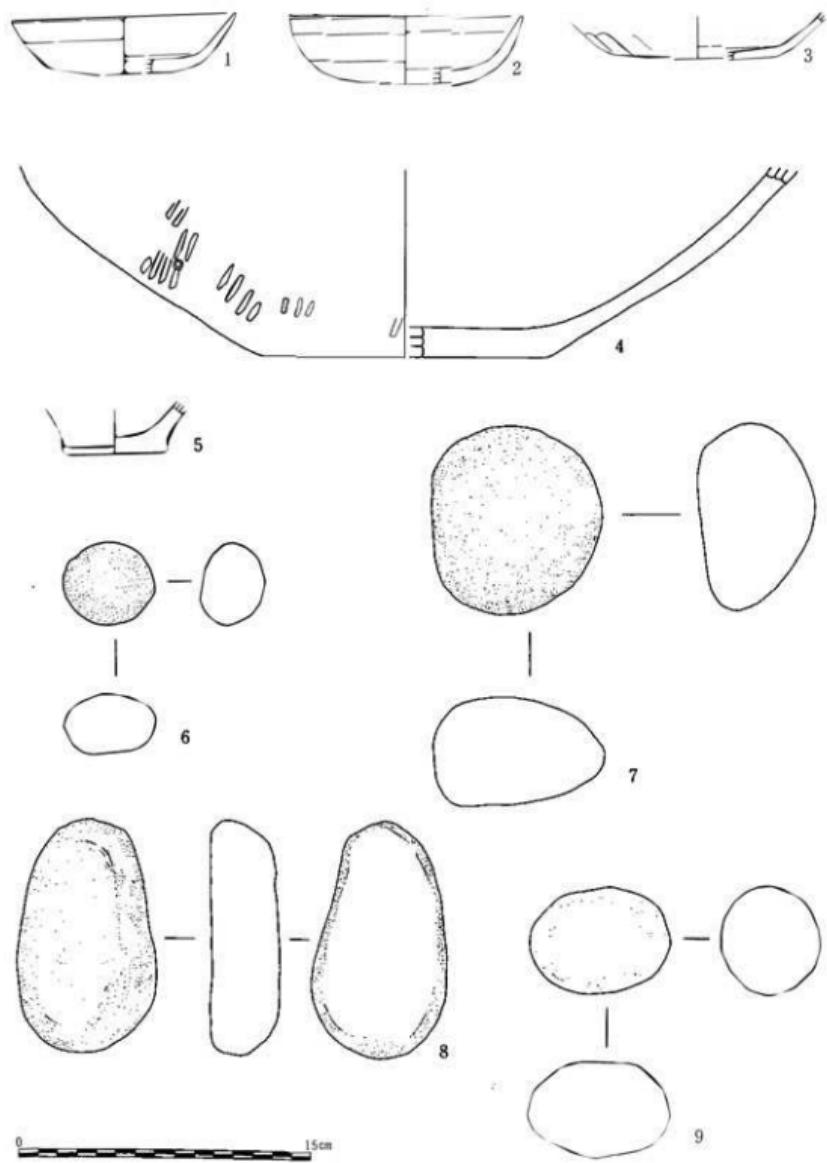
第3図 大畑遺跡全体図

(イ) 第1遺構と出土遺物

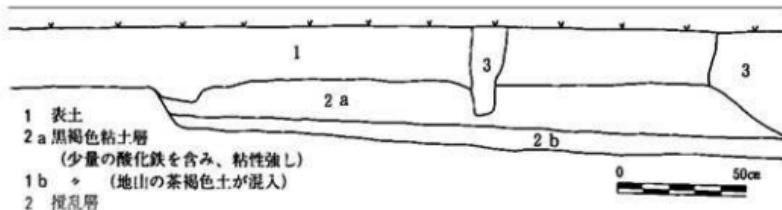
遺構は東西約4.6m、南北約1.4m以上の長方形を呈し、西側は暗渠で破壊されている。深さは東側で30cm、西側で54cmである。

遺物は鬼高か真間式に比定される土師器片4個及び須恵器片、丸石、たたき石状のもの各1個が覆土から出土した。

遺構の構築目的はわからない。



第4図 第1遺構・グリッド出土土器・石器実測図
(1~6 第一遺構・7~9 A・B・C-1~7 グリッド)

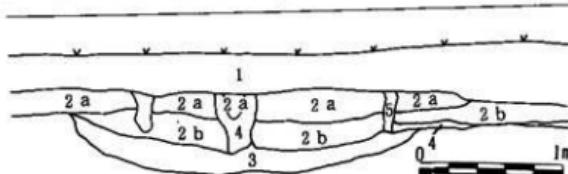


第5図 第1遺構セクション図
(B-3, 4, 5 グリッド南壁セクション図)

(ロ) 第2遺構と出土遺物

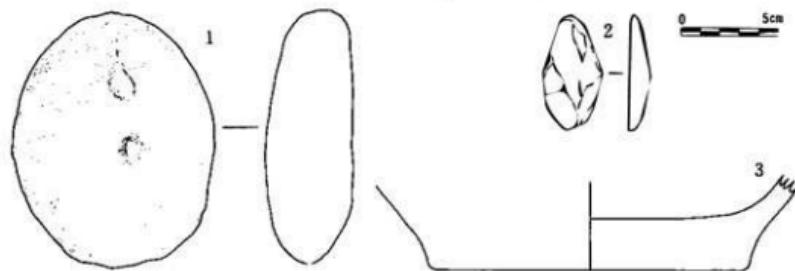
東西約4m、南北4.3m以上の溝状遺構で、北側は路線外に延長しているので、全形は不明である。底は船底状を呈していて、最も深い中心部で約57cmである。遺構の時期はセクションでみると第1遺構と同時期か、これに近い時期とみることができる。

遺物は覆土上層から石器1個が出土した。



1 表土（耕作土） 3 黒色粘土層
2 a 黒褐色土層（粘性あって酸化鉄を含む） 4 褐色砂質層
2 b 黒褐色土層（3層よりも黒味をます） 5 摆乱層

第6図 第2遺構セクション図 (A-12グリッド南壁)

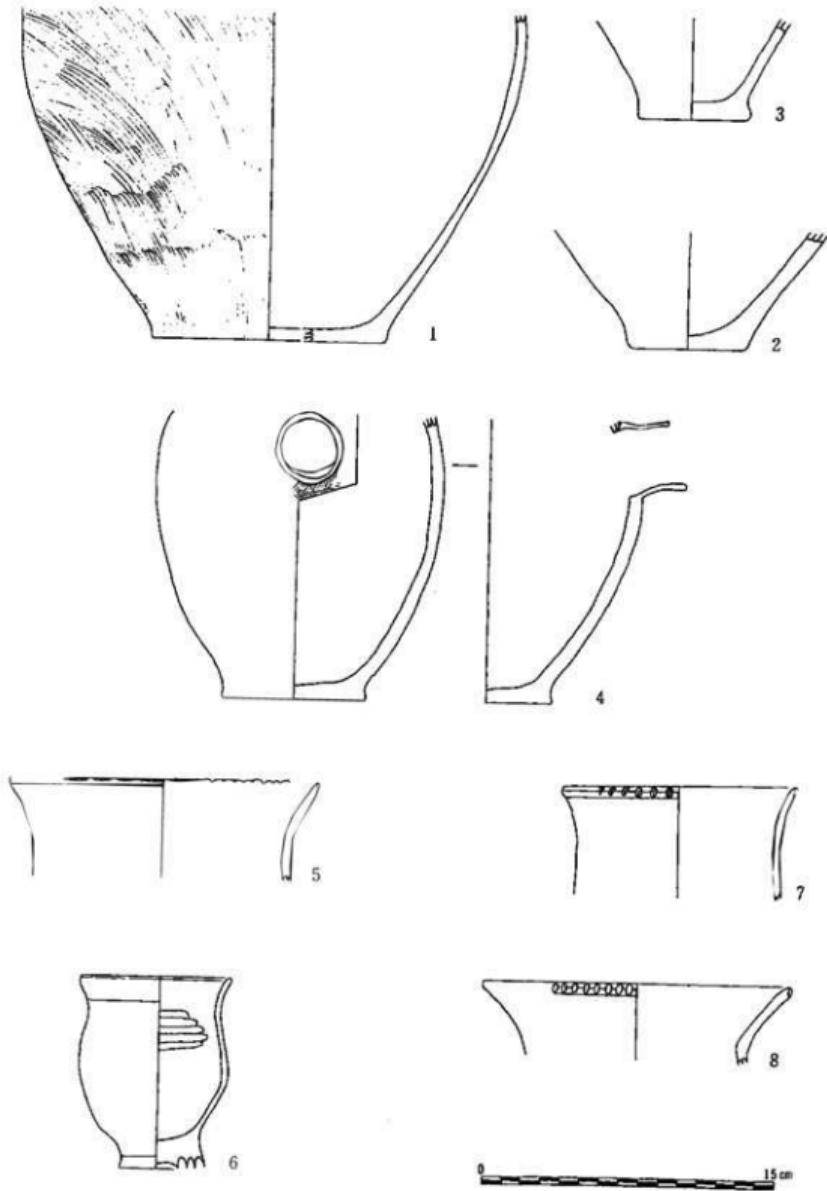


第7図 第2遺構出土石器・グリッド出土土器実測図

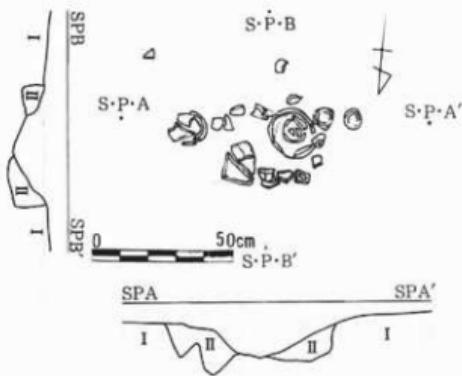
(ハ) 土器

東西70cm、南北40cm深さ13cmで、壁はなだらかに立上っている。

遺物は前野町式期またはその前後と考えられる土器が集中して出土した。第8図の4の中に同図6が入越しになっていた。



第8図 土壤出土土器実測図



I 黒褐色土層（酸化鉄を多量に含み、粘性強）

II 暗褐色土層（粘性弱）

第9図 土壌 土器出土状況

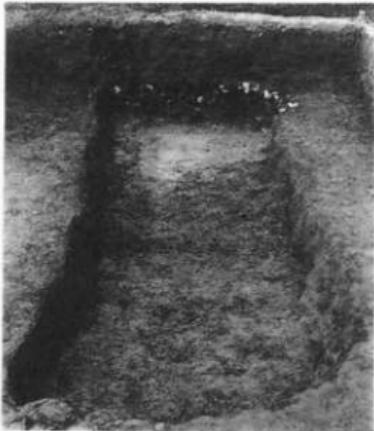
(二) その他の遺物

土壤の付近から丸石やたたき石と縄文時代中期の曾利前半の土器の底部（第4図4）と破片が出土した。



第10図 縄文中期出土土器 拓本

図版
1



第1遺構



土壤 土器出土状況

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第34集

みなみ ほり の うち 遺 跡

おお はた 番 遺 跡

印刷日 1988年3月25日

発行日 1988年3月31日

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 合資会社 ヨネヤ印刷

